

# 学習の過程をとらえる

一人ひとりの理解度や学習の深さを正確にとらえるために

NOBURO HAGIWARA MAR 30, 2018 09:17PM

教師からのfeedbackひとつひとつが、生徒たちの次への可能性を作っている重要なものであり、言葉かけや反応ひとつとっても疎かにしてはいけないと思います。そして、今のその生徒に対して意味のあるfeedbackは何か、注意深く観察し見極め、意図を持って投げかけるべきだと感じました。

## 今年やったこと。

1年間の数学の授業に対するモチベーション、勉強方法、テスト結果など、何でもよいのでコメントの自由記述と自分なりのグラフ、今年うまくいった勉強法と自分の状態の解説を書いてもらった。

B4の用紙で提出してもらったが、結構きちんと書いてくれてとても楽しい成果物であった。

普段生徒たちに対してし経験則から感覚的に接してしまっているので、もっと生徒同士の対話を増やし、質問の質を深め、個別学習とグループ学習を組み合わせた授業を展開して制作過程をもっと評価していきたいと思います。

## 質問は生徒のもの

生徒からの質問が無いのは危険なことと聞いてハッとしました。生徒からの「なぜ」をいつでも出せる環境にしていかないと・・・

## 自分の中の常識

自分が経験して来た環境や体験が習性となってしまったことをいかに自覚出来るか、そして自分の内なる常識をいかに越えて行けるか。越え続けて行きたい。

目的を明確にして、その道筋を確立し実行する事の重要性を再認識できました。これまでの個々の生徒への対応が不十分であったと深く反省しました。成功のrecipeも非常に参考になりました。

## 学習の過程の見取りと評価と

今回、学期末の通信簿を作成（5段階評価）するだけでなく、生徒一人一人に現時点での弱点、改善すべきポイントとこれ

からの学習についての助言をまとめた用紙を配布しました。

それ（＝評価）をするためには結局学習者の学習の過程を把握する必要があります。一斉型の授業ではとてもではありませんが個別の学習状況の把握はできません。

ただ、とても時間がかかって大変でしたが来年度はもっと細かいペースでこの評価をください!と要求がありました。

学習者の可能性を伸ばすのが私たち指導者の使命であり、知識の注入でなく考える練習の場を提供するのが学校であり授業なのかなと思いながら授業をしています。

一斉授業と紋切り型の総括的評価は、教師や学校の生産性と効率率を中心に考えられたsystemだということが田淵先生の実践からつかみとることができると思います。そのような工業型の教育を継続するのではなく、農業型の教育、一本一本の苗の生育に細かく目を配りながら育てあげるpersonalised learningに移行するのを感じます。これには手間と時間がかかりますが、とりわけ通信簿の作成にはあらためて一人ひとりの生徒への助言を書くのではなく、毎時間、毎週出したfeedbackなどを個別のNotesやGoogle docsなどに記録しておき、それらをまとめて渡すという方法もあると思います。生徒、保護者、教師がそれぞれfeedback listを読むことで学期の学習の深い振り返りになると考えます。 - NOBURO HAGIWARA

レッスンが終わったごとに課題を提出させたこと、定期試験で記述を増やしたこと、毎日の学習の中で机間支援しながらメモをためていった。ですかねー。 - IKKOU TABUCHI

どのように一人一人の学習のエビデンスを集めましたか?  
- 勝田浩次

## 成功のレシピ

その場、その時の対応だけでなく、自分の環境を出来るだけ客観的に見て戦略を立てる。

## 個別と一斉の幕の内弁当

生徒を指導する際に、タブレットを使ってやりとりをして、うまくいかない時、やはり直接の対話が必要だと感じたことがあります。また、生徒間の働きかけも大きな力があります。個別の道を示しながら、一斉のダイナミズムをうまく生かすことが大切だと確信しました。

## 形成的評価でのfeedbackのあり方

生徒たちが「可能性」を感じるような、生徒たちの「可能性」を引き出せるようなfeedback、2018年は模索していかねば、とと思いました。

生徒達の活動内容などには危機感も持ってきていましたが、前回・今回と「評価」やfeedbackがいかに大きな役割を果たすものなのか、考えることができました。ありがとうございます。

## Feedback

自分のフィードバックが生徒に届いているのかな？と思う前に、届くようにしていたのかな？と反省しました。一方通行にしていたのは、自分の方だったと思います。学習の個別化の必要性を感じています。フィードバックはその点でもとても重要だと思いました。

## 2017年度の評価

アウトプットの種類を増やすことのできた1年だったが、それを正しく評価できていると確信を持って言えないので、来年度さらに研究したい。生徒へのFeedbackをいろんな方法で行うよう心がけようと思った。また、理解の進んでいる生徒に対して、さらに先を見据えた発問が大切であると改めて感じた。

ただ、生徒1人1人に細かいレポートを書くという経験は、普段の授業での取り組みをこちらが把握するかで内容に深みができることがよくわかりました。

## 可能性

今日はこの言葉です。評価、Feedbackに「可能性」を加える。自分の未来を面白く感じることができるように、明るい未来を作れるようなfeedbackを教師と生徒がお互いにできるような関係を構築したいと思います。feedbackをするために生徒の意見や考えを取集めることはしたくないです。目的と手段を間違えない。生徒と教師が共通の目的、目標を持つことができれば手段は決まるのではないかと（何でも良いのでは）と思います。

一般におこなわれている「授業の感想」というような焦点のぼやけたfeedbackの取り方には意義は薄いと思います。

— NOBURO HAGIWARA

## 学習の過程

前回、評価について学んだときに、自分が普段からやっている評価のあまりのダメさに凹みました。そのあと「生徒に寄り添った評価とは？」を考えて過ごしてきて、今年度末は生徒の小テストの得点だけでなく、生徒が作成した動画の比重を多く

して、平常点をつけてみました。今回、そもそも授業の中でもっと変えられること、私からの発問の仕方、方法など多くについて振り返るきっかけを与えていただけたので、4月からの授業に生かしたいと思いました。

また、話がそれるのですが、いま受け持っている生徒は自己肯定感が低い子が多く（日本の子は全体にそうなのかもしれませんが）、自己肯定感を高める工夫を昨秋から学年上げて行ってきました。最後の「成功のレシピ」はそんな彼らに自分の苦手なところばかり注目するのではなく強みやチャンスを生かせるのではないかと感じたので、還元したいと思いました。

毎年東京の高校生のCBLをお手伝いしていますが、必ず『「自己肯定感」を高めるには』などのような課題を挙げてくるgroupがあります。教師や保護者だけでなく、生徒たちも「自己肯定感」が低いと感じている事実でしょう。しかしながら、この言葉の意味することを私は明確につかむことができません。どのような思考や行動の傾向を指しているのかわかりません。「自己肯定感」は「自己否定感」の対極にあるとも言えないと感じています。次回の講座で先生方と話し合いたいと思います。 — NOBURO HAGIWARA

## 評価を再評価する

3回に渡って評価の学習会で、これまでやられてきた評価が、学習者にとって本当にためになる評価になっているのか、あらためて考える機会をいただきました。

ペーパーテストの得点だけが評価なのではなく、教師はつねに学習者を評価を与えているのだと気付かされました。また、学習者が習得したこと、理解したことを、得意なことで表現することを代表に、もっと多様な評価があっていいはずで、かつそれに教師が対応できるようになることが求められていると思いました。

「質問の良し悪しで学習の深度が変わってくる。」今回の講座の中で先生がこのように述べられてから、生徒の問いたてを来月から見守っていききたいと改めて思いました。

生徒向けで、いい問いたての仕方がありますか？ダンさんのQFT以外で、プロジェクト型学習につながる問いたての方法が知りたいです。

Project Based Learning, Challenge Based Learningのような学習形態での問いかけ（質問）は、生徒たちの学習活動を導いていくことが主眼となります。生徒たちが見つけてきた「問題」、あるいは教師が出す「課題」に対して①知っていることは何ですか ②知っていることが正しいかどうか、どうやって確かめますか ③知らないことは何ですか ④知らないことをどうやって調べますか という方向付けの質問をします。②と④については文献やInternetだけでなく5感を駆使して実地調査、実験、聞き込みなどprimary informationを重視することの重要性を話し合いを通して指摘します。

— NOBURO HAGIWARA

## 2017

2017年度は、児童理解に徹した日々でした。個に応じた授業や児童に対して一人一人接していたつもりであったことがよくわかる年でした。一人一人みているようでみていなかったことに気づかされ、危機が大きくなった日が多くありました。成功のrecipeは、児童と向き合う。保護者と向き合う。を徹底した日々。気のはる毎日でしたが、一年を通して児童とも少しずつわかりあえ、保護者と協力し児童への理解につながったことは、見方を変えれたことの一つになりました。

質問を取り上げていただきありがとうございました。

Feedbackの「要素」、「質」と、焦点を絞って議論ができたことが有意義でした。

感じたこととしては、生徒一人一人に応じてFeedbackの質を変えていく必要があるということです。その子の学習状況をしっかりとみとり、その子に応じたFeedbackをする必要があると感じました。その質を見極めるために、感覚にもとづいて行うのではなく、授業の目的と照らし合わせ、根拠に基づいた生徒の現状把握をすることが必要であることに気がつきました。

## Feedbackの具体的な姿

\*\*\*\*\*